

共命の鳥(ぐみようちよう)のはなし

令和三年十一月二十六日 於加茂法話会

①昔、インドの雪山(せつせん)ヒマラヤ山脈)に、共命鳥という鳥かおりました。この鳥は、一つの体に二つの頭がありました。一方を迦嚙茶鳥(かるだちよう)と言ひ、もう一方を優波迦嚙茶鳥(うばかるだちよう)と申します。この鳥は、一方が眠っていても、もう一方は、必ず起きておりました。

ある日、優波迦嚙茶が眠っているとき、近くにあった摩頭迦(まずか)という木に咲いていた花が、頭上へ落ちてきました。優波迦嚙茶が目覚めました。すると、おながが一杯になっていた。

数日たったある日、この共命鳥が飛行していると、優波迦嚙茶が、目ざとく、毒花を見つけました。優波迦嚙茶は、『わたしが、あの毒花を食べれば、我々は、同時に死んでしまうであろう。そして、優波迦嚙茶に、「君は、わたしが眠っている間に、何か悪いものを食べたのではないか。すると、優波迦嚙茶は、「その通り。おまえが眠っている間に、毒花を食べたのだ。ふたりが同時に死ぬことを願って、そのようなことをしたのだ」と答えた。「愚痴の人とともにいることは、自分にとって、まったく、利益が無い。自分の身を損じ、他人の身をも損じることになる」と、偈を読んで、命終したのであります。仏・菩薩の心をあらわすためには、悪い心の強い人、愚痴の人、諸法の人、これらの人を悪知識と申しますが、悪知識には、近寄るべきではありません。正しい方向に導いてくれる人、善知識に近づくべきであります。

②比翼の鳥

比翼の鳥(ひよくのとり)は、古代中国の伝説上の生物。鵽けんげん、蛮蛮ばんばんとも呼ばれる。伝説では、「一つの翼と一つの眼しか持たないため、雄鳥と雌鳥が隣り合い、互いに飛行を支援しなければ飛ぶことができない。『山海経』の「五蔵山経西山経」によれば、この鳥が現れると、洪水が起きるといふ。『爾雅』の郭璞(276—324)東晋(とうしん)の文人)による注釈によれば、鳧(マガモ)に似て、青赤色をしている。

③「ヨゲンノトリ」

③鳥が、安政五(一八五八)去年の十二月に加賀国に現れて言う事には、「来年の八月、九月の頃、世の中の人が九割方死ぬという難(コレラ)が起こる。それについて、我らの姿を朝夕に仰ぎ、信心するものは必ずその難を逃れることができるであろう。」これは熊野七社大権現のすぐれた武徳をあらわす鳥であると言われている。今年の八月・九月に至り、多くの人が死んだ。まさしく神の力、不思議なお告げである。正壽寺吳定明合掌

① 共命鳥



② 比翼鳥



③ 予言鳥

